

《論文》

体育授業における戦術学習に関する一考察（2）

—サッカーを専門とする教員への意識調査から—

深田 忠徳

体育授業における戦術学習に関する一考察（2）

—サッカーを専門とする教員への意識調査から—

深田 忠徳

和文抄録：本研究の目的は、体育授業における「戦術学習」の実態及びそれに関する教員の意識について明らかにすることである。

研究の方法は、サッカーを専門とする高校教員へのインタビュー調査である。対象者へは半構造化インタビューを実施した。質問項目は、高等学校学習指導要領解説にある「ボール操作」及び「ボールを持たない時の動き」におけるそれぞれの「例示」に記された内容を設定した。

教員は、生涯スポーツの観点から「戦術学習」の重要性を認識しており、基本的技術レベルの低い学習者の立場に立って、彼らが楽しめるように工夫しながら、そのレベルに応じた指導を実践しているということが明らかになった。

キーワード：体育教員、戦術、生涯スポーツ

1 はじめに

ボール運動や球技は、多くの学校の体育授業において実践されている。そこでは、単なる技術獲得のためのドリル練習、またはゲームのみの学習といった授業形態から「戦術学習」に着目した授業展開がなされてきている。その事例として、岡出ら¹⁾は、戦術学習モデルの有効性について、小学校におけるフラッグフットボールを教材に検証している。また、松元²⁾は、大学の一般体育における戦術学習の意義についてフラッグフットボールにて実践研究を行っている。フラッグフットボールは、ボール操作が容易であるという利点があることから、戦術学習を深めることができる教材として位置づけられる。他の種目では、起田ら³⁾が、バレーボール（ホールディングバレーボール）において学習者が根拠に基づいた具体的な作戦が立てられることに焦点化して中学校での実験授業を実施している。また、馬渡ら⁴⁾は、高校の体育授業においてバスケットボールの戦術学習についての実践研究を行っている。

このように戦術学習について多くの研究がなされている。その代表的な研究が、グリフィンの「戦術アプローチ」であろう。それは、これまでの体育授業における伝統的なゲーム指導では、ゲームに生かせる実践的なプレイへの視点が欠落していた点を踏まえて、学習者のゲームへの関心を高め、ゲーム時のプレイ場面において豊かな知識と能力を育むことを特徴としている⁵⁾。そこで、本研究では、サッカー教材に着目して、サッカーを専門とする現場教員へのインタビュー調査から、体育授業における「戦術学習」の実態及びそれに関する教員の意識について明らかにすることを目的とする。なお、本研究は、「体育授業における戦術学習に関する一考察（1）」⁶⁾の継続研究となる。

2 方法

調査対象者は、サッカーを専門とする高校の教員1名である。対象者は、長年サッカーに携わっており、サッカーの専門家（サッカー歴30年、教員歴15年）という立場から専門的知識や情報を有していると考えられる。よって、研究課題に関する多くの情報収集が期待されることから対象者を選定した。分析データは、対象者1名に対して面接者1名で、半構造化インタビューによって収集した。インタビューの時期は、2016年7月19日、時間は2時間10分であった。なお、インタビューの際には、対象者へ研究目的の説明及び、インタビュー内容をICレコーダーにて録音することの承諾を得たうえで実施した。質問項目については、高等学校学習指導要領解説の「例示」（「ボール操作」及び「ボールを持たない時の動き」）に沿って逐一質問していく形式で実施した。「例示」については以下のとおりである。なお、サッカー教材に合致しない内容は除外することで対応した。

高等学校学習指導要領解説の例示⁷⁾

| |
|--|
| 1 ボール操作の例示 |
| (1) 入学年次 ・守備者が守りにくいタイミングでシュートを打つこと。 ・ゴールの枠内にシュートをコントロールすること。 ・味方が操作しやすいパスを送ること。 ・守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープすること。 |
| (2) その次の年次以降 ・守備者のタイミングをはずし、守備者のいないところをねらってシュートを打つこと。 ・味方が作りだした空間にパスを送ること。 ・ゴールに向かってボールをコントロールして運ぶこと。 ・守備者とボールの間に自分の体を入れて、味方と相手の動きを見ながらボールをキープすること。 ・シュートを打たれない空間にボールをクリアすること。 |
| 2 ボールを持たない時の動きの例示 |
| (1) 入学年次 ・ゴール前に広い空間を作り出すために、守備者を引き付けてゴールから離れること。 ・パスを出した後に次のパスを受ける動きをすること。 ・ボール保持者が進行できる空間を作り出すために、進行方向から離れること。 ・ゴールとボール保持者を結んだ直線上で守ること。 ・ゴール前の空いている場所をカバーすること。 |
| (2) その次の年次以降 ・自陣から相手陣地の侵入しやすい場所に移動すること。 ・シュートやトライをしたり、パスを受けたりするために味方が作りだした空間に移動すること。 ・ボール保持者がプレイしやすい空間を作り出すために、必要な場所に留まったり、移動したりすること。 ・スクリーンプレイやポストプレイなどの味方が侵入する空間を作り出す動きをすること。 ・得点を取るためのフォーメーションやセットプレイなどのチームの役割に応じた動きをすること。 ・チームの作戦に応じた守備位置に移動し、相手のボールを奪うための動きをすること。 ・味方が抜かれた際に、攻撃者を止めるためのカバーの動きをすること。 ・一定のエリアからシュートを打ちにくい空間に相手や相手のボールを追い出す守備の動きをすること。 |

3 結果と考察

テキスト分析によって、「未熟な技術レベル」「技術レベルに応じた指導」「生涯スポーツにおける戦術学習の意義」「表現の曖昧性」にカテゴリ化した。以下、各カテゴリで考察していく。

(1) 未熟な技術レベル

個人戦術においては、安定したボール操作と、ボールを持たない時の質の高い動きが求められる。とりわけ、体育授業においては、サッカーの基本的技術であるボール操作が未熟であるようだ。

表1 未熟なボール操作

| |
|---|
| 率直に言えば、安定したボール操作は非常に難しい。普段から足を使わない、生活のなかで足を使ってボールを操作する。 |
| 選択制なので、初めてサッカーをする子であったり、部活動生もいます。そういった技術的なギャップが大きい中で、安定したボール操作を授業の中で学ぼうというのは、そういった授業の中身を組み立てられても、それが確実に身に付く、「安定してシュートを打つこと」「奪われないで」とそこの言葉というのは現場では非常に難しいというのはあります。 |
| 子どもたちの喜びや楽しみはシュートを打つことなので、ゴールがあればシュートを打つようなそういった働きかけはしてますし、「好きにやれ」といったら子供たちはゴールを置いていればシュートを打ちますね。まあ必然とゴールに対してシュートを打つという行為はしているような状況です。そこに対して、「シュートをコントロールする」。現状としては、どの部分でこういったシュートを打つともないんですね、イメージが。それを飛び越して「シュートをコントロールする」、しかも「枠内に」。非常に難しいですね。 |
| 授業も高校1・2生ぐらいまではインサイドキックとかをやっても当然できない。選択の期間は長くて2カ月ですかね。2カ月のなかで週3時間、1回50分間の授業ですけど、全体の流れとしては、「導入・まとめ」を除けば35分ぐらい。そこで、キックって難しいですね、サッカーの指導において。キックを身につけさせるというのは。そういった基本的なキックのところを通り越しているような段階、基が安定したボール操作になっているので段階が。「枠内に打て」といって部活動生でも打てないような状況なのに。まあ目指そうとしている、枠内にシュートをコントロールしようとさせることはできますけど、そこに蹴り方とか意図的なコントロールというのはこれも同じく難しいところではありますね。 |
| (味方が操作しやすいパスを送ることについて) 2対1とかさしても、空いた味方がいた。それに対して真横に出すのか、斜め前に出すのか。真横に出せばすぐ相手がくる。斜め前に出せばそのままボールを持たないで前方に進める。それが表現的に言えば「味方が操作しやすいパスを送ること」になるかもしれない。でも問題はここではなくて、そのパスができる、できないではなくて、そのパスが送れる状況になること。パスを出す前提には、「安定したボール操作」が必要になってくる。でも、そこが難しい、要は。 |
| (守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープすることについて) 実践させたことがないですね。結局、サッカーというのは何かをしながら何かをする。もちろん球技は全部そうなんだけど、そのなかでバスケットとかと違って扱う所が目と遠かったりすれば、サッカーもボールを扱いながら周りを観る。扱いながら観ること、動きながらボールを操作すること。だから、何かしながら何かするというのはすごく難しく、ましてはボールを扱おうとするときに守備との関係が出て来るわけでしょ。うーん、させたことがないですね。守備がいなくてもボールがキープできるか分からないしね。 |
| (守備者とボールの間に自分の体を入れて、味方と相手の動きを見ながらボールをキープすること) 授業の現場ではまずない。その前の段階でもなかったわけだから、当然ながらないね。でも、これができたら面白いだろうね。ここからさらに味方が創り出した空間にパスを送ることなんかに発展していけばだけど、部活動でもじゅうぶんままならない状態を授業でやっていくことで、困難だよな。 |
| どの空間を使おう、前の空間しかないわけよ。余計なことははぶく、前に出るために。他の部分でこのフォーメーションで役割を持たせるというのは難しいね。自分のその特徴を自分でもチームでも理解しないといけないもんね。 自分自身の特徴も認識できない。人よりボールが蹴れるぐらいだよな。あと、足が速いとか。背が高いからどうってことないからね、授業で。ヘディングもボールが落ちるところをわかる子が頭にあたるんだもん。背の高さがどうのこうのは問題ではない。 |

ボール操作が未熟な学習者にとっては、例示されている内容は高度なレベルにあるといえる。部活動生でも確実に実践できるかというレベルが要求されているようである。パス、シュート、ボールキープ、ヘディングなど、それぞれの基本的技能について生徒らは例示されている内容を実践できるレベルに至っていないことが教員のコメントから垣間見ることができる。さらに、教員は生徒の技術レベルの現状を具体的に次のように述べている。

表2 技術レベルの低さ

| |
|--|
| <p>「守りにくいタイミング」難しいですね。それを具体的にどうイメージするか。基本的にシュートを打つ時は、生徒はシュートを打ちたいときに打つ、打てるときに打つ、ゴールが近くなったから打つ。そこに守備者の状況は全く入ってないですね。これはボール以外にいろいろ見ないといけないですよ。サッカーをやる人間にとってはすごく難しい部分になってくるのかなと思いますね。こういったところまで踏み込んで授業を展開するのは現実的ではないですね。</p> |
| <p>中学校の段階から体育の授業でサッカーだけをとるのであれば、身に付く子もいるかもしれないね、サッカー部ではなくても。けど、そうではないからね。選択ということで、去年バレーやってバスケやったから、そろそろサッカーやってみようかぐらいの感じでくる子に対して、「守備者のタイミングを外した」守り方まで理解させないといけないもんね。どうやったら守りにくいのか。蹴る前に観ながらやらないといけないもんね。観るってやっぱり高校生の部活動でも観る習慣はついてない。それを授業でやっていくというのも、うーん。指導していくのは、そんな難しくはない。「観ようね」と言えばなしてしまえばそんな難しくはないけど、本当にそれを目的としてさせるには…。</p> |
| <p>ゴールを守った、ボールに対して守備ができた。それがいいカバーに結果的になっちゃうよね。戦術的には起こりえない。反射だよ。ボールが来たからボールに行った、ぐらいの感じだよ。ここに（相手）居た事で動いたでしよ、とかではないよね。高校生はそうやってゴール前の守備の位置はとらない。なんとなくゴール付近に立ってて、結果そこにボールがきて、結果自分がボールを扱うと。意図的ではない。無意識に。</p> |
| <p>まず見るのは、ボールを観て、仲間を観る。相手の守備までみれたら、それに越したことはないけど。これは部活動レベルかな。部活でもバランスとれないのね。一人二人ではないもんね。三人でもないよね。全員だよ全員。いろんな要素がいるよね。サッカーの最高峰じゃん。</p> |
| <p>守備しながら、バランスよく侵入するって。フィールド10人が全員運動量を確保して、味方の距離とか把握しながら動いていくわけでしょ。求めるところは間違っていないと思うけど、「それ目指していきましょう」と教えることはできる。実践はできないね。</p> |
| <p>ゴール前は特に難しいね。「空間」、そんなの見てないよ。ボールしか見てないよ。</p> |

ここでは、生徒の現状が詳細に述べられている。生徒は、ディフェンスなど関係なく自身が打ちたいときにシュートをしたり、守備の際には無意識のうちにカバーをしたりしているようだ。つまり、タイミングやカバーリング、空間を認識したプレイなどの戦術的理解がないままにサッカーを実践している。教員は戦術学習についての重要性は認識しているが、それを教授していくことで次のような問題点を挙げている。

表3 授業の不成立

| |
|--|
| <p>教えたいけど。じゃあ、これやるぞといって、楽しくないでしょ。できないのを継続してやっても楽しくないよね。</p> |
| <p>（例示されている内容を指導案のねらいとして設定することについて） （それは）しない。指導できないから。うまく授業が成立しないことが目に見えているから。これを指導案にあげて、じゃあこれやりましょう。 評価はできるかもしれない。関心・意欲・態度に関してもみれるところはあるし、思考・判断、技能としては難しいところはあると思うけど、それ以外の部分の思考・判断のところをみれば、うまく蹴れなかったけど観ようとしたな、とか。評価をやれっていわれたらやれないことはない。ただ、技能として成立していないから。</p> |
| <p>（例示の内容を授業の「ねらい」として持ってくるには） 勇気がいるね。勇気がいるよこれは。まあこれだけに限らず。</p> |

教員は、例示されている内容を教えることで、生徒にとっては「楽しくない」授業になると述べる。例示の内容を授業の目的に設定することも「授業の不成立」を予見している。日頃から、生徒に触れ合っている教員は戦術学習に特化した内容を授業で展開すれば、生徒が意欲的に活動しないということを危惧しているようである。

(2) 技術レベルに応じた指導

大多数の生徒は技術レベルが低く、「安定したボール操作」ができていないのが現状であった。そのため戦術学習に特化した指導は困難であるとの教員の見解もあった。しかしながら、教員は学習者の技術レベルに応じた指導を実践している。

表4 技術レベルに応じた指導

| |
|--|
| <p>意図的なコントロールまではいかない。むしろ地面に付いてるボールなんかは特にいかない。つま先に当っちゃう。意図的に浮かしたような状態で蹴らしてあげると比較的早いボールだとか、蹴った本人が満足するような、まあそれが意図的かどうかはわからないけど、満足するようなシュートにはなる。外しても上に外せばすっきりしたみたいなの、ボテボテじゃなくて。置いたボールをインステップで蹴れというのは難しい。</p> |
| <p>(ゴールに向かってボールをコントロールして運ぶこと)</p> <p>これは、納得。大事だね。これは声掛けして、それだけの意識をさせればある程度の子は運ぼうとするよね。だから、これに関連して体の向きなんかも「どっちがいいのか」というところは現場で指導はしますね。理解力もあります。「確かにそうだな」と。でも、できないのだよ。右から来たボールを左足で、「分かっている、確かにそうだ。」でもできないの。だったら、「ボールを来た方向に、右足でコントロールした方がいいんじゃないか」という子どもたちの考えになっちゃう。</p> |
| <p>(ゴール前に広い空間を作り出すために、守備者を引き付けてゴールから離れること)</p> <p>ボールを持たない時の動きというのは、これは授業ですごく活用していて、なぜかと思ったら「ボール操作」ができないから。教えるのは、「ボールを持たない時の動き」というのが結構ある。サッカーの指導案をどう書くかといったら、この「ボールを持たない動き」というところをねらいとした方が授業がうまく進んでいく。それは全部ボール操作ができないから。</p> |
| <p>ボールを持たない動きを示すのはサッカーでなくてもできるわけよ。足で扱えないから導入の1・2時間は手でボールを扱って、うまく人から離れたりだとか、スペースに走って行って手でボールを投げてそこでボールを受けたりだとか。マンツーマンでさせていかにしてボールを持っている人のパスを、どうやって前で扱うかというのを全部手で操作させて。そのようにしてボールを持たない動きというのをさせるわけ。まあ比較的教えやすい部分ではある。</p> <p>味方から離れる動き、人のいない場所に移動する動き、こちら辺は単純に手で扱ってやる。そして、守備の時も「相手の動きに対応して相手をマークして守る動き」と「所定の空間をカバーして守る動き」、これなんかも2対2なんかをさせてボールには一人行って、「じゃあ、もう一人はどこに行くの？」ていったときに、相手にだけつくのではなくて、カバーの位置を理解させてその位置をとらせて、カバーリングとマークを観ながらというところで指導はしやすい。生徒も理解しやすい。</p> |
| <p>この場面は難しいね。味方のために空間を作り出す、たぶんこれ以外のとこだったら、大丈夫なのかな。だけど、ゴール決めたいとかなる場面でしょ、それは突っ込むよ。味方のためにというところまでは頭働かないし。そうしたところをこっちは望まない。もう「行けー、行けー」と。「チャンスだぞみんな行けー」と。</p> |
| <p>せっかくゴール前のチャンスになったのに、それはみんな行かすでしょ、できるだけ、「行け行け行けー、みんな行けー」となったなかで、「お前はこう、お前はこう」、そこにパスが来るとも限らんしな。来たところに対応する。そのためにはそれなりの人を(ゴール前に)置く。空間を作り出すことは難しいね。連携が必要だね。</p> |
| <p>まあわからないでもない。ゴール前の3対2とかするとき、これに近い様な指導はしますけどね。サポートなんかはいかないね。これはもう出して前に走れ、というそれぐらいだよ。前のスペースしかない。(後ろのサポートとかは)ないね。なぜなら、ボールを操作しないためにだよ。前に行くためには扱わないことだよ、と言ってるもんね。これはもう、前方の動きでしかない。サポートとかわからないね。例えば、サポートとかの動きを教えたらピンチになるからね。真ん中が空くからさ、それでボール操作もできないわけだから、そこで引っかかる可能性が高いわけでしょ。だったら、「サポート、ワイド開かなかった方がいいじゃん」となっちゃうから。</p> |
| <p>広い空間を使うために、その広さのキックとかも必要になってくるでしょ。空間をうまくとれたとしても繋がらないわけよね。うまく距離を取ったから相手は分散されるけど、ボールは失うよね、操作ができないから。広くない方がいいわけだから。出そうとしてもたいがい引っかかるからね。</p> <p>理屈としては分かるよ、生徒も思うかも。「先生、理屈としては分かります。けど蹴れないですもん」とか。「いや、早いボールやった方が、お前が扱って次プレイするまでの守備の時間も長く取れるんだぞ」と言っても「早く蹴れたら蹴りますよ、そこに蹴れるんだったら蹴りますよ、それができないんですよ」となっちゃうかな。</p> |
| <p>守備をしなくてもボールが自分のところに来るんだよ。なぜなら、操作できないから。2対2とかでカバーの位置を教えてもそれがゲームでは、その状況にならない。なぜなら、守備をしなくてもマイボールになるから。</p> |

教員は、サッカーの醍醐味を生徒が享受できるように工夫しながら指導をしている。そこでは、生徒の立場から、学習者がいかに楽しみながら取り組めるかということを念頭に指導している。戦術的に教え過ぎて学習者が困惑しないように技術レベルに応じたコーチングをしたり、守備の戦術理解を促すために手でボールを扱いながら学習したりしている。教員の一方的な指導ではなく、学習者の論理を踏まえながら授業が展開されている。そうすることが、学習者の満足度を高めることにつながっていくのである。

（3）生涯スポーツにおける戦術学習の意義

生涯スポーツの重要性は、これまでの体育の変遷過程において明白なものとなっている。教員は「楽しい体育」を展開するために、サッカーの技術指導だけではなく、それに関する知識を獲得させることも重視している。

表5 生涯スポーツと戦術学習

| |
|---|
| <p>高校の体育は、一番のねらいは生涯スポーツなので、スポーツを通して楽しみ・喜び、まあそこらへんを味わせることをメインにしてるなかで、ボール操作は基本的にできない。でも、楽しみを与えるためにどう授業を展開していくか、というのが現場で一番考えているところですね。</p> |
| <p>それは戦術として教えることはすごく意味があること。それはスポーツの関わり方を生涯スポーツといったけど、するスポーツだけじゃなくて、観る・支える。私の授業のなかでは審判も教えるんです。副審も入れて、副審の旗の上げ方とか、どの位置につくかとか。それは何かと言えば、審判をすることが目的ではなくて、メディアでサッカーがある中でなんで旗が上がって、なんでオフサイドがあってというのを観て面白くさせる。ただ、この「守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープすること」ということをサッカーのひとつの戦術として教えてあげることはそれはすごく有意義なことだと思う。すること、これはさせるということでしょ、これはちょっと難しいよね。そうすることでどうなるのか、周りがどうなるのか、というのをサッカーの知識として教えることはすごく有意義だと思いますね。</p> |
| <p>（味方が作りだした空間にパスを送ることについて）</p> <p>こういうのも知識としては教えたいわけよね。テレビを見てても、「あっ、てこういうことかなって」という部分だから、知識としては与えたいな、「ね、おもしろいでしょ」で「こういうボールの位置だけではなくてさ、ボール以外のところで面白さがでてくるね」と知識としてはいいんだけど、やっぱり実践の部分だよな。</p> |
| <p>上手にさせるのは難しい。でもサッカーを理解させるのはそこまで困難ではない。サッカーの理解とはどういうことかといったら、それこそ空間というのはたくさんあるけれども、そういったところをうまく見つけて作る。そのあたりぐらいは、ボール操作を外して指導できる部分だよな。他の球技にも通ずるものなので、ボールを持たない動きをメインとして指導していくこと。ここが一番授業が成立するいい条件ですよな。</p> |
| <p>生涯スポーツはするだけではないので、ボールを持たない動きというのをきちんと教えることは、テレビでサッカーの映像が流れたときにちょっと理解できる部分も広がっていくのかな。サッカーの上手なのはやっぱりボール操作がメインであって、まあそれも見て上手と思うのもいいけど、授業ではボールを持たない動きを知って、それをまあいざこう注目されないけどそうした動きがわかってくれたら授業の成果はあったのかなと。スポーツはする、観る、ささえるとか観る部分に発展していければいいんじゃないかなと思うよね。</p> |
| <p>これ全部プレイのことでしょ。打つこと、コントロールすること。ボールをキープすること。そこを理解させることなんだよ。理解させることはすごく有意義。それをさせることは酷。理解させることはすごくいいと思う。せっかくサッカーを選択したのだから。授業で言うのは、サッカーをちょっと上手になることと理解すること。ルールとかオフサイドとか副審もそうだし。サッカーの審判も本当は3人いて、4人いてとか、いうけど。すごく上手になることというのは難しい。でもちょっとは上手になろう、でもサッカーは理解しよう、というのを授業の最初に目標で今日の単元のねらいということでは示してはいるけどね。</p> |

教員は、サッカーの技術獲得だけではなく、知識や戦術的な理解度を深めることがサッカーをより享受できることにつながっていくと考えている。そのために、理解を深めるための指導や審判方法についての学習なども盛り込まれている。そうすることで、「するスポーツ」だけではなく、「みるスポーツ」の楽しさも授業を通して学習させている。すなわち、教員は、生徒自らが、「生涯スポーツ」を主体的に実践できる態度の醸成を意

図して授業を展開しているのである。

(4) 表現の曖昧性

教員は、戦術学習の重要性や意義について認識しており、レベルが高いながらも例示された学習内容についても理解を示している。しかしながら、その表記のしかたに問題があると指摘している。

表6 表現の曖昧性

| |
|---|
| 表現も難しいですね。「守備者が守りにくいタイミング」。むしろボールを持っている人間のことを考えて、打ちやすい、距離の問題とか、ボールを中心に書かれてた方が指導もしやすいでしょうね。これはサッカーを専門にやっていない人なんか余計に文章で理解ができないのではないかと思いますね。 |
| (シュートを打たれない空間にボールをクリアーすること) サッカーやっている人間だったら、先にさわるのが第一だからね、この状況だったら。先にさわろうとしてプレースピードを上げれば、当然周りは見れなくなる中で、文科省がそういった状況で空間というのは、イコール距離ですよという解釈であることを期待する。打たれない空間というのは、打たれない距離、打たれない場所まで飛ばせ、ゴールから離れろ、そうであることをそんな解釈で。それなら納得。できるか、できないかはそれこそまた別問題。クリアーという意味合いを指導して、危機を回避する、それがクリアーだよと教えて、でも、実際のゲームになればどうか、自然にやるわけだもんね。個々の解釈は距離であってほしいな。 表現が雑だよね。空間という使い方が良くないよね。空間というのが、ここで言う空間という言葉自体が引っかかるな。場所とか地点とか。 |
| ひとつ前の文と重ねると矛盾しているよね、表現が。「ゴール前の空いている場所をカバーすること」、その前は「ゴールとボール保持者を結んだ直線上で守ること」。一致しないよね。どちらもそうなんだけど、どこが危ないの、難しいな。どこが危ないかわからない。空いてる場所を埋めなさい、それどころではない。要求が高いかな。 |
| (一定のエリアからシュートを打ちにくい空間に相手や相手のボールを追い出す守備の動きをすること) 表現が悪いよね。わからないよね。体育の先生で、サッカー専門なんて一部だからね、たくさんいるなかで。専門外が見る方が多いのだから。 |
| 特に専門ではない先生なんかが授業を担当するときにこういったところでイメージをうまくもてない。文章でイメージが持てない。さらに解決策もわからない。「先生これどうしたらよいですか」に対して解決策もわからない。 |

サッカーの専門家なら理解できるが、他の種目を専門とする教員には表記された内容を正しく解釈することが困難であると指摘する。教員側からすれば、サッカーの場面ごとにおける「タイミング」や「空間」などの表現が曖昧であり、イメージしにくいようである。したがって、教員が共通認識のうえで指導しうるために専門用語の明確化（定義付け）やプレイ場面ごとのより詳細な解説が望まれよう。

4 結語

対象者は、インタビューの最後に全体的な印象を次のように語った。「ちょっと現場と距離がある。要求が高いことがほとんどですね。経験が浅い高校生に対して求めるところに届かない現状があるということ。生涯スポーツを謳っているのに対してすごく専門的に入りすぎている。現場としては、困りますよね。」このコメントから、現場レベルと学習指導要領解説の例示との間に溝があるということが理解できる。そこには、学習者の基本的な技術レベルの低さ、とりわけ「未熟なボール操作」が要因となっている。しかしながら、教員は、生涯スポーツの観点から「戦術学習」の重要性を認識しており、学習者の立場に立って、彼・彼女らが楽しめるように工夫しながら、そのレベルに応じた指導を実践している。ゴール型のなかでもサッカー教材はボールを足で扱うという特性があり、一般生徒の技術獲得及び戦術理解へ向けた指導方法には、さらなる実践研究の蓄積が求められるであろう。

文献

- 1 岡出美則, 劉 静波, 吉永武史, 鬼澤陽子, 小松崎聡 (2007) 戦術学習モデルの効果の検討—小学校におけるフラッグフットボールの授業分析を通して—, スポーツ教育学研究27 (1), pp.37-50.
- 2 松元 剛 (2013) 大学体育における戦術学習の可能性について, 大学体育研究35, pp.27-36.
- 3 起田新也, 原 克浩, 則元志郎 (2007) 戦術学習の指導内容に関する研究—バレーボールを教材として—, 熊本大学教育学部紀要56, pp.253-263.
- 4 馬渡洗二, 松村友紀, 則元志郎 (2013) 体育授業における戦術学習内容の検討—バスケットボール教材の中心に—, 熊本大学教育学部紀要62, pp.225-232.
- 5 Linda Griffin, Stephen Mitchell, Judy Oslin著, 高橋健夫, 岡出美則監訳 (1999) ボール運動の指導プログラム—新しい戦術学習の進め方—, 大修館書店, pp.6-7.
- 6 深田忠徳 (2017) 体育授業における戦術学習に関する一考察 (1), 鹿児島国際大学福祉社会学部論集36-1, pp.43-52.
- 7 文部科学省 (2009) 「高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編」東山書房, pp.61-62.

A study on Tactics Learning in Physical Education (2)

—From the survey on consciousness of teacher specializing in soccer—

Tadanori FUKADA

The purpose of this research is to clarify the actual situation of 'tactics learning' and the consciousness of teachers in physical education lessons.

The method of research is an interview survey to high school teacher specializing in soccer. This study conducted semi-structured interview for the target. For the question items, this study set contents described in each "example" in "on the ball skills" and "off the ball movement" in the explanation on high school learning guidelines.

Teachers recognized the importance of "tactics learning" from the perspective of lifelong sports. In addition, it became clear that teachers are practicing guidance according to that level while devising them to entertain learners, from the standpoint of learners with a low basic skill level.

Key Words: Physical Education Teacher, Tactics, Lifelong Sports